

共同存在的空間論 (1)**

—現象する〈床〉の構造について—

水 田 一 征*

()

Untersuchung Zum Raum-Phänomen Des Mit-Seins.

—Über die vor der Leiblichkeit erscheinende Struktur
der „Juka“-Phänomen.—

Kazuyuki MIZUTA

(Received Sept. 30. 1977)

Hier liegt eine Skizze über den Raum der „Juka“, d, h, einer in Japan typischen Bewegungsebene für die alltaglichgewöhnlichen Handlungen, in der Absicht.

1) Dabei spielt ein Begriff, „Leiblichkeit“ von Menschen als „Da-Sein“ hier eine wichtige Rolle.

Das Verhältnis vom Raum als unserer Lebenswelt und Leib als Da-Sein oder Mitdasein ist ursprünglich korrelativerscheinend in deren Phänomena.

Leiblichkeit kann nicht „vor“ Räumlichkeit sein, auch die Letzte nicht „vor“ der Erste, denn die Eine bedarf unbedingt der Andere, um leiblich oder räumlich zu sein.

Vom diesen Standpunkt her ist die Raumstruktur phänomenologisch skizziert, besonders um die lebende Struktur der lebenden „Juka“ klar zu machen.

2) Etwas klar erscheint sich die Differenz zwischen der „Juka“ und der erdhaften Boden. Dabei handelt es sich um „Juka“-Struktur als den über Erde schwebenden Fussboden wegen der Entfernungsfunktion.

3) Dem auf „Juka“ seienden gibt die „Vergegenwärtung“ der Erde, die eines mütterlichen, bedeutungsvollen und aller möglichen Ursprungs, eine spezielle, räumliche Seinsweise, Kontinuität, Offenheit und Zusammensein mit Natur. Darauf verändert die Struktur des Raumes sich zur di-zentrischen, schichtweisen Räumlichkeit des Existierens.

(I) 序

言葉に出して論理づけ理屈を付けることでは、何等の不都合もないかの如くに考えられることでも、看過

しそうで看過出来ず、どこかしら腑に落ちずにもやもやした状況、観念があつて、それにびったり対応する直観的なイメージ、構造的な差異性が与えられて初めて、その異和感が文句のない整合的体験に、統一的な

* 建築学教室

** 昭和52年9月17日 広島工業大学研究発表会にて発表

了解に至る様なことは、我々日常よく体験する。

例えば、コンクリートの壁に囲まれ、徹底的に閉鎖された函としての住宅空間の中で、考えもなく惰性的に敷かれた畳が、その場所を得ない、冴えた姿とは程遠い、異和的な姿をしていることを体験することが少なくない。効用としての実用性には、又、旧来からのその材料の占める部分位置——例えば、〈床〉に畳——に、何等変りはないのに、全体としてはどうも不整合な体験等。

新しい世界への進入口としての、新しく、別様の、独創的な畳の空間性と呼ぶには、その余りに貧しく、異様な〈在り様〉には、〈住まう〉ことの更に別なる可能性の出現——異種な文化との出逢いにも似た創造的な場に見られる積極的な混沌の如き可能性——さえ期待出来そうにない。そこでは、畳を生きて〈住まう〉ことの意味がもはや、残存していない惨たんたる相貌、別ものに変様したが、如何様にとはまるで不明確な、全体を欠いた部分としてのままに止まる様相が残る。

素描としての比の論文は、世界の共同存在的な具現化としての建築なるものの在り方を、現象する〈床〉の場に何うべく意図されている。その際、照明を当てられて浮び上るのは、間身体的なレベルに顕現し、現実として現在化しているもの・〈現象する空間〉の現存化している構造であって、そのことは、建築の現象学の為の資料とすることが本意であって、計画学の、演繹論理の公理、公準とでも言うものの抽出を経て、因果的な論理付けをすることが目論まれているのではない。建築空間に限らず、ある全一的で統一なるものの部分は、機械論的構造の部分としての単純集積という総和の要素的なあり方ではなくて、言わば全体を部分に具現する様な系としての、システムとしての、全体の契機をなすと考えられる。〈床〉は当前、その上部の統合構造たる建築空間の部分として有機的な器官として位置していると考えられる故に、全体から切り離され裸になり、それ故〈生きていない〉〈床〉を扱うのではなく、それ等の関わりという全体の中で、〈床〉に照明を当て、〈床〉を主題化して記述を進めるのである。

言葉の不足、不充分であることを補い、語っている場の想起を明らかにする為にも、〈床〉と、それと同一の上部構造の傘の内に在る〈フロアー〉との比較と共に論を進めることにする。

その方法として、現象する空間を記述するには、現象学的な見方が採用され、それ故、まずもって、我々

の根底的な〈つまり存在論的な〉身体、つまり“見る私”の在り様に触れられねばならない。

(II) 身体—構造—世界

“建築する”営為が、その世界内にある現存在の“今在る”〈ここ〉なる場所を、脅威と親密でない范濶たる世界なる広がりから切り取る行為によって、根源的に生成するのであれば、建立され具象化されたるものは、私共の何等かの意志が事物の形態という共同存在的な直観なる形式を取るに至った、秀れて人間固有の作業である。その事物の形態は、それ故に、その意志（分離し、切り取る意志）を構造の内に内包し、空間と共に現象して来る。

道は2点間の連続の意志を。扉は閉鎖し、切り取られた空間から、外なる世界への連続と拒否の意志を。階段は連続と切断の両義の意志を……。

それは、永い時間をかけて踏み固められ、出発点と到着点を共有しようとする人々の、共通の営為を通じて確認され、実践的に徐々に形象を伴って顕在化して来る道の様に、それを取りまく世界を構造化し、共通の世界の在り様を素描している。

その世界の在り様としての地平を背景にした建築的空間をめぐっての、人間と物と世界の、相互の統合的関係を、空間の構造とすれば、メルロ・ポンティエーの構造を避けては論を進められない。

彼の構造は、生きられる身体という主体存在の対世界の構造であり、行動の構造であり、ひいてはその生体に現象する世界の構造へと結びついている¹⁾。

生きられる身体である私と世界との関わりに於ては、一方に私の身体があって、他方に知性を持った私の自我があるのではなくて、世界と関わり対話している生体だけが存在するのであり、対話している限りで生きられる身体である。

ともすれば、従来、身体と云えば、既にして構成されたものとしての装置、器官として、心理学、生理学、医学の学域で“見られ”て来た。いわゆる見られ触れられる対象であり、物象化されたものと考えられ勝ちであった。そこには、“私の身体”としての在り方はなくて、どこまでも、その身体を対象としての“見る私”の局在性を求めなければならない、——例えば、脳の中に外部からの信号の伝達を“見る小人”を設定する如き——トートロジーを空しく繰り返すことになる。

当前、そこには私の占める場所もないが故に開示して来る私の世界も、死して後、消滅するはずの世界もない。

生きられる身体は、だから、既にして此の世界に在りつつも、自らも世界も構成しつつ構成されるところの、対象的に此の世の中に投げ入れられた客観であり、世界へ向けて超脱して行く骨肉を備えた主観である。

人間が生来、未熟児として此の世に寄るべく生を受け、それ故に開かれて、順次成長する存在であることは、又、その世界の真只中で、その世界によって形成され構成されるものであることを示している²⁾。その意味において正に、世界内存在である。ということは同時に、そもそも此の世界に生まれて来た時からして不断に世界と対話していることであって、我々の身体は、単に状況とは独立に求心的に凝縮するだけの存在ではなく、恒に構成されつつも構成する在り方を備えた身体として、私の在る〈ここ〉から、他者のある〈そこ〉へと、時間的にも空間的にも遠心的に志向し、延長拡大しつつ局在する私でもある。正しく、現存在としての私であり、その私なる生体の現実世界に対するの身構え、対世界態度は、その眼なごしの中に、言葉の中に結実する。

その時、光や色や形、延長と持続の世界が、直かに、私に“見え”る。見ている私に、それ等を、具体的な個物として、骨肉をそなえた在り方 (Leiblichkeit) で直接手渡してくれる私の直観的身体志向としての働きを知覚と云い、その際、知覚の対象は、射映の内に、又、それ故に現前化する予描と共に出現し、私と対象は地続きに1つの世界に帰属し、私は、“見えているもの”を自から組織化する。正にその限りにおいても、“私は私なる身体を生き”、その私の“周り”に、身体という行動する肉化した主体としての私の在り様——行動の構造——に応じて、事物を取り集める。

家とは、正に、私が此の世界に住み込む為に、無限なる〈外界〉空間から一区画を切り取るることによって、住み込む意味に従って1つの特殊な統一体を形成し、外界なるものを再構成し、中心と周縁部という図式を具象化したものであり、世界秩序の具象化である。そこに、個との顕在的体験の中に、共にそこに『予描され』ている潜在的で現前している連関が、世界なる地平として開けてきている。

別の云い方をすると、人が世界の中に在ることは、マルティン・ブーバーの原離隔³⁾に際して看られる如く、身体が自己組織化し、中心化——いま、ここ——を巧まず行っていることにおいて、自然——今まだ他者ならざる他——が分節化されて、自然と身体とのある種の二分法が生じ、その自然と身体との関わりにお

いて、世界が具現して来る⁴⁾のである。その世界は、私共の発達段階に応じた固有の行動様式に準じる環境の図式的構造である⁵⁾。

フッサールの現象学を継承し、身体と世界との構造に注目したメルロ・ポンティは、ゲシュタルト心理学の全体的場の理論⁶⁾を契機として、知覚の自律的体制化を主張し、しかも、ゲシュタルト学説が陥ち込んだ因果律—実体論を排して、世界との対話の内こそ、私と世界との関わりは様々な水準が、生体の行動の構造的な様々な違い——例えば、『癒合的形態』・『可換的形態』・『象徴的形態』⁷⁾——に対応して様々な世界意識、地平意識が当前考えられる。例えば、その様々な水準、世界内での刺激と反応における構造化の様々なタイプが、物理的秩序、生命的秩序、人間的秩序なる意味の3秩序として区別されて来る⁸⁾という。その時、以前の水準は、その度ごとに否定されたり、止揚されたりするのではなくて、お互いに同等同格の水準として、お互いを〈基づける〉関係にあって、より熟成された構造に統合されるのであり、より上位の統一の支えとなって豊かさを増すのである。

実在のある秩序から他の秩序へ、身体から心へ、物から意識へではなくて、初歩的構造から、より自律的、より有意味な、より統合された構造へと移行する⁹⁾のであって、先行秩序の捉え直し、新しい更なる構造化、弁証法として理解される。

正にそれ故にこそ、世界は単に一義的な集積としてではなくて、多義的であり、意識(志向性)の持つ様々な主題化に対応した様々な相貌を呈するのである。

世界は、自然は、だから、現象的には千変万化するからこそ、種々の潜在的体験の地平を包括する『絶対的地平』——フッサール——として在るのである。

既述の様に、外なる世界へ向けて、行為する——知覚も、言語も、身体運動も——私が眼差しを投げる主題化の様態に、例えば〈床〉に向けての主題化に、三つの異なる態度を取り得ると考えられる。

第一には、云わば文字通りそれ自身で現在している物の個別性の内に在る特質で、癒合的な表情としての触覚、味覚に対応する物の組成(きめ)で、云い代える感覚的な知覚の態度であって、堅さであり重さであり、光であり色である様な特質を現在化する態度。

第二には、その物自体性を超えて、その位置関係、ゲシュタルトとしての外部地平の参入を待ち、云わば関連それ自体とでも云えるものを見る知覚の態度であって、その材質性のある開かれた規定性の内で浮んでいて、大地に密着しない、土地の代替物としてではな

い〈床〉の在り方を指向する態度。

最後には、上記の両者を支えにしつつも、それを超越して——フッサールの存在措定の中性化的変様を経て——意味とも、空間とも呼び得るもの——〈床〉の場合には、連続的開放的な人間的に演出された日本の空間——に向かう態度。そこに見える現実 (Realität) を、私は現象する〈床〉と称する。

世界を語る場合に、その世界を根底的に生きている自然的世界の構造が、生きられる空間の構造が、日常世界、人間的世界の構造が、極めて個人的なる見えを越えて、共同主観的たり得るかどうかは、今まだ明瞭に論理づけられているわけではないが、少なくとも生きられた現象のなかでの明証性を頼りとすることは記述に際しては許されるだろう。

ポンティは知覚とは、人間が身体主体、生体存在であって、まだ意識的実存に至ってないような地平に既に存在していると云う。

『知覚というものは、常に〈ひと〉という在り方のうちにとどまっている。つまり、それは、私自身が私の生活に或る新たな意味を与える手段となるような人格的行為ではない。感覚的探索のなかで、現在に過去を与え、それを未来へと方向づけるものは、自律的な主体としての私ではなく、ひとつの身体を持ち、また〈まなざす〉すべを心得ている限りでの私なのである。』(知覚の現象学Ⅱ、みすず書房、56頁)

即ち、〈床〉に即して述べてみると、知覚の射映と現前化の能作の内に現われる〈床〉は、身体の主体性が、前意識的、前人称的なそれであり、その限りにおいて間身体的構造としての〈床〉が、その未人格的な、意識下の沈黙せる構造を内に含んで建ち上っている。それに、いわゆる文化的秩序、云わずと知れた共同存在的価値の秩序の参入を得て豊かさを確立(ラング化)した上部構造としての〈床〉が在ると云える。つまり、そこに現象する世界に、私達とか、人間のと形容出来る原初的構造、知覚世界で出現する構造がある。

どのような人でも日常世界での在り方が、他者の存在を排去して在り得るとは想像だにしないだろうし出来ない。空間共有的な関わりも、それを越えた範疇を通じての関わりも含んだところの、否も応もなく、世界の中に投げ込まれて、〈いま、ここ〉に在る(現存)ことを、暗黙の内に了解しているが故に、始源的

に直立態存在と不離な世界内存在¹⁰⁾としての自己定立が基本をなしていると云え様。

身体は、例えば道具とか他者の媒介を通じて人間が私になっていくのであるが、その拡大されていく身体の自己性は、他者を媒介にした間身体的な自己把握を前提にしているし、それに対して表われる世界は脱中心化された間身体的なパースペクティブにおける世界であると云える。だから当前に、私のみの世界と云うわけではなく、私というものも、結局は他者との関わりにおいて他者であり、その関わりは意識的と云うよりは、間身体的な関わりであって、その間身体的な関わりの中で私が在るという様相を持つ。だから、ある意味では拡大された身体と考えてもいいのであるが、それは歴史的、文化的形成物としての社会的身体ということである¹¹⁾。又、実存する(Existieren, 外へ出て立つ)とは、既述の被投性と現存在の両義をなすもので、別の場へ、おのれの可能存在へと自己を投企する意だが、加うるに、共同存在的場へと投企することでもあり、そうすることによって、〈人〉は、人と人との間、つまり、人間——じんかん——に第2の中心とも云えるものを創生して人間——にんげん——となる¹²⁾。

(Ⅲ) 現象としての〈床〉。—その外部地平—

我々の思考の担い手である言葉は、一定の文脈や行動の脈絡のなかで、その意味を確定することから考えると、当前、言葉は、その言葉を生きる身体と、その世界との、同時的な形態化としての所作であり、又、所作の表現操作の内てただ一つ、沈黙作用を起し、相互主観的な、それ故、共同存在的な、獲得物を構成することになる¹³⁾。そうすることによって、言葉は、存在の棲家として、語られた空間の構造を暗示し、語る主体の世界内での態度を暗黙の内に含み、空間への志向性を意味として生成せしめる。

その処に、私達の空間現象を、又、その構造を探るのにも、語源学が、解釈学が力を発揮することが出来、その空間に対応した行為を指示する言葉に露呈する行動の構造的な差が、その空間の立ち現われの構造的な差異に準じていると考えられる¹⁴⁾。

ここで、現象としての〈床〉の構造を明らかにする為に、まず、〈床〉と類同的な日常的範疇という、その上部構造に属していると思わせる〈基壇〉と比較しつつ論を進めることにする。

既述して来た如くに、身体(直立態)が体示している〈いま、ここ〉の在り方に立脚して、〈いつかは、

そこ>という向こうに生成している<床>の存在論的構造は、<床>も<基壇>も相共に、身体が予描する営為の可能性に準拠した、主題化された地平として、その場所が<図>として、<地>なる背景として横たわり、<ここ>なる場と地続きにある基盤をなす水平面としての大地と、同時併存して¹⁵⁾、地の大地より卓越して際立っている。しかし、その際立ちの様態に、<床>と<基壇>は差異がある。

両者共に、<地>としての大地の<上方>に位置し、点的ではなく、ある限界と広がりをも備えた<図>として、知覚の内に射映している。

ここで、その差異を見る為に、その場を記述する言葉を中心にして考察することが、その構造を明らかにする有力な手掛りになる。

<床>も<基壇>も、共に<上方>に存することを顕在化する主題化された広がりという在り方からして、<下>に、即ち大地に立居る身体にとっての、その<上方>に在る広がりへの志向を素描する言葉として、<あがる>と<のぼる>という差のある2つのものがある。つまり<あがる>所作と<のぼる>所作が差異を示していることは、当前、前記の如くに、主体身体が素描し、対象が射映しているもの——ひいては現前化しているものも——に、差があり、主題化の様相——つまりは現象する世界としての<床>——が異っていることを暗示している。

例えば、日常に気なく、しかも適確に、我が家を訪れる人に対して、『おあがり下さい。』と呼びかけて<あがる>ことを求めても、<のぼる>行為は予想だにしていない。

又、西洋では、例えフローアと外の地面との間に高低差が目立つ程あっても、Come-in, Herein. と呼びかけて、<上方へ>とは求めない更に別なる差異、<上方>よりは<中へ>、内へ>という主題化に見られる身体志向の差で代表出来る様な、住居の境界が示している切断の差がある。

つまり、結論を一言で先に云ってしまうと、<基壇>の場合には、盛り上った大地としての、変様した大地の在り方を伺うことが出来、顕在的にせよ、潜在的に地平であれ、恒に、大地と地続きの、大地の勢力圏域の内懐の中での話であり、<床>は、それから源初的に離脱し、浮んだ、人工的で虚構的な行為の面の具現化としての板である。

対基壇の行為に用いる言葉として、私共は、<のぼる>も<あがる>も共に用いるのではあるが、その身体志向している主題化された焦点が異っていて、

<あがる>時には、<上方へ>の切断を得て定立されている上の面であって、そこに私の身体意識が及んでいて、<いま、ここ>なる大地から、一気に、別の<いま、ここ>——かつての、<いつか、そこ>——へ身を移すことを素描している。又、その越えられない断絶を見る時には、<決して、そこ>へ……を引き受ける水平面としての主題化を示している。それに対して<のぼる>時には、大地の変様としての充実した連続が主題化されていて、その充実を伝いつつ<上方>へ移行することを示唆していて、いわば、<基壇>の<段階>を<のぼる>ことである。

他方、<床>の場合には、日頃、その言葉を使用している場を想起してみると判る様に、<のぼる>所作よりは、<あがる>行為の方が、ある共通の明証性を示して適切であるのは、<床>の場合、恒に焦点は、二つの面としての大地を<床>との関係が、予め、確固たる射映する距離、切断を、顕示されている限界域を、<肉の重み>に支えられて、<上方へ>と越える<そこ>への移動の在り方が、<ここ>に居る私なる身体の内予描されているからである。その切断を越えて、身体で素描されつつ、瞬時にして行なわれる劇的な上方変換を<あがる>と云うことが出来よう。

<のぼる>在り方は、例えば、階段を<のぼる>、木を<のぼる>、山に<のぼる>に見られる様に、又、その行為、所作を増幅し強調する言葉としての<よじのぼる>にも現われる或る種の持続する肉体の営為に対応していて、前もって予め身体がそこに予料している充実した連続体が前提として在って、その連続体を順次、伝いつつ、確認しつつ、予描を充実しつつ<上方へ>の移動を<のぼる>と云い、常にある空間性の保持を表わして、空間の変様に主題化されていない。そこには、<よじり>、<のぼられる>ものとしての充実した連結体の、辿り計られ得る延長の、又は傾斜した同一性の見えがなければならぬ。山に<のぼる>、丘に<のぼる>は、過程、道程での身体を云うのであって、断絶による分離された2つの場所の関係を指示するのではない。

逆に、<床>をめぐる場合、<あがる>行為が身体的に準備されていて、空間的な変様体験を経て実現、実結するのであるが、それが<のぼる>所作を含むには、<床>の在り様が、極めて隔っていて、非主題的にあれ、副次的にであれ、無視出来ない程の存在契機として主張して来る、隔りを継ぐ連続体が、見られる場合である。<基壇>も既述の様に、その両相を持つが、他の例、高床に<のぼる>、火の見櫓に

〈のぼる〉、二階に〈のぼる〉、樹上の〈床〉に〈のぼる〉という一連の表現は、いわゆる、高床の階段を〈のぼる〉、櫓の梯子を〈のぼる〉、二階への階段を〈のぼる〉、樹の幹を〈のぼる〉という表現の代りであって、ただ習慣的な脈絡、近接関係による暗喩的レトリックであり、やはり、ある広がりから、〈上方〉の広がりへの直接移行でなく、その両者の間に差し挟まれた連続体の現存の上に成立する表現である。

〈あがる〉は、〈揚がる〉、〈上る〉、〈騰る〉に共通に潜在している地平としての意を持っていて、例えば、風呂から〈揚がる〉のは、別段、風呂桶と洗場、又は板場との間に高低差がなくても、又、逆転している様な極端な場合にも、やはり用いられるのは、やはり、直立態——又は、それへと準備されて在中坐居態——に基づいた、射映と現前化の作用としての知覚し、生きられる身体が体験する処の、或る地平（〈いま、ここ〉を成立させている地平）から、他の地平（〈いつか、そこ〉なる上方地平）への、ドラマスティックな移動による、空間変様の体験であると云えるのではなからうか。海から〈あがる〉、舞台上に〈あがる〉、双六が〈あがる〉、のぼせて〈あがる〉は全て、云わば、大地からの、現実からの離脱の意に至る〈上方〉へという方向を内包した劇的な空間変換であり、単なる視点の変換による“見え”としての外なる世界の事実的な、物的な変換で表現出来る事態ではない。

〈基壇〉である場合には、それ自身が充実した量塊としての大地の分岐であり、盛り上った大地の変様態である小さな人工の丘である。

〈フロアー〉とは、その上に在る私には、その〈基壇〉が顕示している加工された大地の表出面の在り様を残存させた、〈基壇〉の水平面としてそのまま、又は、〈基壇〉から適当に剝り取った量塊の不在として残った Void の下面たる水平面として、いく重にも現われる。加うるに、〈基壇〉の特殊変態としての、それ自身自立し実体を宿して独立する隔壁よっての切断で造出された〈内〉なる空間——Raum¹⁶⁾に見られる様に、元来、非措定的である面として、その両方——Raum と大地との二相——に帰属する可能性を負う。

身体は、〈床〉上での私の態位を通して、向うなる〈床〉の上に投鑑し、〈横臥し得る〉、〈坐居し得る〉柔かさと温かさをそこに見得るが故にも、図化を強めて地なる大地から、その選ばれた力を〈床〉へと引き渡す。つまり、〈床〉の側なる大地部分は、も早、横臥も、坐居も出来得る多義的な深みをはぎ取られ

て、身体の温もりから遠ざけられ、非主題化されて、増々、地化することになる。このことは、海水浴場の海の家なる〈床〉の傍らの、砂の大地が示している坐るに坐れない、寝るにも適当でない在り様を想起する丈でも十分に了解出来よう。

〈床〉は、複合した多義的な存在たる大地の持つある面を選択的に避けて、別なる不確定な地平で〈床〉は生きていて、限定された周縁的多義性を未分化の、限定性の具現として、大地との地続きであることからキッパリと切れて、しかも大地を射程の内に取り込んで浮揚している。〈床〉の下なるもの、つまりは大地からの離隔の深みと大地なる存在、地続きでない処に、根源的な充実した深みを露呈して絶対の信頼としての広がりなる存在が、〈床〉を透して、〈床〉と共に現前化、現在化しているが故に、〈床〉が大地と対面した地平であるが故に、〈床〉の立ち現われには、大地が関与し、大地の疑いを容れない基本的地平が、その空間変様の質を決定して、それを身体が直観的に了解するのである。

身体的直観とは、我々の身体が識る意味であり、我々が身体で確かめるが如き、確かめる以前に既に何ものが在って、悟性に促されて身体が後発的に最終決定を仕上げることではない。身体が世界であり、世界の構造に、身体が構造がなじみ、合致し、乖離しない様相である。

私が空間であり、空間が身体である私の空間の在り方は、逆に非物質的で非実体的世界である大空と、余りに充実した無限の実体に満ちている大地は、此の身体の投企（身体図式）としての“見えの行為”さえも及ばなくて、私なる身体でなぞらうことを許さない非交感的世界として私を超えるが故に、超越的な者の棲家となる。

〈床〉は、混沌にして暗黒の暗闇、未分化で多義的な諸々のものが生まれ死んでいく不可解にして可能性に満ちた気配としての大地の広がりから浮揚し、上方へと位置し、超越なる明るく輝くものの棲む領域へと足を踏み入れ、此岸を体現する大地の上の私の位置を下にするが故に、パレリーナの爪先立ちに似て、透明で軽やかに、清んだ水の如くに抗抵なく流れる広がり、虚構的に装備され、身体により確かめられる明晰な地平を造出する。その明晰さは、床が真っ平で凹凸がなく、どこまでも均質に貫ぬき広がるからだけではなく、上方への跳躍が示すにも似て、大地からの束縛からの離脱、地に足を着けた私からの離脱という鳥瞰的な世界の明晰さに関わっていよう。高下駄をは

いた私が体験する大地の肌触りからの隔離の如くに。

(Ⅳ) 現象としての〈床〉。—その内部地平—

① 〈床〉と〈底〉

場所の構成のための始源たる切断の方法に、既述した中にも散見出来る如く、2様態が在り、そこに出現する場所の下面をなす行為の水平面は、横方向の切断を行うことによって完結した、求心的な Void の下面をなす大地密着型の〈フローア〉と、上方への隔離をまって成立する未完結な大地浮揚型の〈床〉とがある。

前者の空間の水平面は、立居する行為を卓越した在り方として主題化されているが故に、Void 内での上下方向の秩序は、立居する主体を中心として、行為水平面を大地にとる底的様相に準じて、組織づけられている。そこでは、その現象している場の——体験される空間の——更にその下なる存在の在、不在さえ、問題にならず、一義的で、それっ切りの、際限のない深みと力のみを現出する大地そのものである。それ故に、その Void の内での安息と安寧の場の建立には、確固たる、明瞭な、底なす大地からの隔てを必要とすることになる。

他方、後者の〈床〉は、その第一義的な隔てとして、キッパリと大地から切れて、その全ての存在を支える根源としての大地を地とした上の図として、それ自身求心的な完結したまとまりと閉合性を示し、〈坐居する〉身体を主題化し、その図式化を通じて定立する浮揚する板状の道具（横方向の切断を記号的に表現している障子、真壁等の道具建具と同様のまとまりと同類の道具性と、仮に称しておく。）なるものとして現われ、それにより造出される空間（上下方向に分節化され、しかも現的に連続された空間）に、我々と関わる秩序構造を、その身体態位を迎え含むことで付与する。

身体が支える意味として、即ち、材料を得、それをしかも超えて、私共に対し、その〈床〉の上の広がりが大地の加工された変様様態——大地は、変々流転する中にも、力強い確定感、全てを包摂する奥深さ、堅固な不動性を含む、しかも柔軟さと湿った香気、気配に充ちた生の根源としての“見え”をなす——と切れた、繊細な靱性と、種々の態位にある身体になじむ、親密な、認められ確かめられた触れに支えられた意味として、〈そこ〉に、〈我、寝る能う〉、〈横たわり得る〉、〈坐ることが可能〉な対話的場の相貌を暗黙の地平に持つ〈床〉が、浮揚していると考えられる。

〈床〉は、大地と平行に、大地を覆うが故に、大地が持つ種々の可能性からのその上方への隔てによって明晰化と、浮揚することで空に上揚する身体との弁証法的統合の場として、我々なる人間世界へ開示されて在る共同存在へ向けて機能し始める。それは、外なる他者を、その上なる共同な他者に共通に見通せるが故に、他者性を予測し、他者へ向けて演出された〈床〉の上なる空間となる。このことは、壁に囲まれた Void が、外なる者の参画を根底に含まず、完全に切断されることにより発生的に求心的なまとまりと、それ自身の内に完遂している在り方とは、全く別様であることと比べると明らかである。

その場合、又、〈基壇〉〈フローア〉に立ち現われている大地なる様態は、〈底〉なる存在として、大地の分肢の如くに起き上った隔壁と同様に、云わば鋳型に鋳込まれ、抑圧され、服従的で人間の意図の中に封じ込められ、飼い慣らされて固定化し、十全なる大地として生きることを停止せしめられ、死化粧を施された、切り取られた大地としての片隣をのぞかせて居るのみであるが、〈床〉は、既述の構造の具現化、生化であって、そこではまだ大地は生々流転し千変万化する奥深い母なる大地として、力を認められ望まれて、それ故に今まだ定立されざる可能を秘めたるものとして、うごめき、気配に充ち、風をはらみ、景を宿す生きられたるままに、そのまま在ることを耐え、残している。だからこそ、寸土の坪庭と云えども、一本の竹、一滴の水音に、象徴される丈でなく、〈いま、ここ〉が〈床〉の上であるが故にも、現在化しつつある大地の気配に手渡されて、一本の竹に、一滴の水に、白砂と石に、大地、自然が肉化されて、骨肉を得て、坪庭が、他ならない大地の相貌を顕わにし、自然を具現し、生きて在ることになれるのである。

もし、〈床〉が単に、自由に私に操作される対象であるならば、〈床〉の物理的状況は如何であれ、その空間性は私の空間性として、私を中心にして、私に向っての諸事物の秩序へと環元出来るであろう。

がしかし、日常体験している〈床〉の姿は、決して、世界から切り取られた量塊である Void の底的な様相を帯びていず、我々によって支えられている私が行為する〈床〉なる地平は、〈底〉的の大地から、ある程度解放されることによって、我々の規範の身体化されたものの手で、独自に空間的秩序を産むことを可能にした開かれた様相を備えている。

大地の闇と混沌、豊饒と無限の力、生命の湧き出ずる根源。此の非論理とでも云える暗黒の情念の世界か

ら離れ、又、天と共に最も自明なるものでありつつも、なお実は、全ての体験の背景に黒々と広がる暗い存在としての大地の未規定で多義的にして多色の地なる薄暮に身を置く代りに、それを周縁に帯同しつつ、それと共に伴走しつつ、それから隔ることによって、光輝き、軽快で、透明な大空の世界に分け入った、浮び上る〈床〉だからこそ、その上に在る者を、現存在として顕現させる更なる地として、未規定で、透明なる開けとして、薄明の周域 (Umkreis) を形成し、その上に在る私を、此岸側に留め置き、地続きであるものと関連しつつ、或る所に位置せしめることができるのであろう。又、付言すれば、〈床〉上の私を、大地との関わりへと限るには、天井 (屋根) が力を持ち、上方と地上性ととの両義を顕在化する間隙 (Zwischen-Raum) と、そこでの層化 (後述) に参画するのは当前であらう。

此の様にして、身体化された共同存在の手触りを現在化する材料を導入して、立居する私の世界中心的な特権的在り様は、半ば脱落し、大地は〈床〉の種々の射映の背後から、潜在的な姿で現前化させられることの内に閉じ込められ、私なる身体は拡散し、中心性は〈床〉へと引き寄せられる。だから、そこに於ては、安息の時空は、その〈床〉の持つ可能態を、共同存在的に認められた記号を契機として、社会的に実体化され、現前化される丈で十分となる。家具、建具、布団、什器は、空間を演出する記号として、そこに機能する出番を迎えることになる。

基本的には、“地続き”なることに準拠する地平の層化という秩序に基点を置き、空間の色相に変化をもたらす志向性の具体例であると云えよう。

② 層化

此処までは、日常生活空間の既成の意味の根源的なものを、上下方向の切断を中心にして記述して来たが、それのみで〈床〉と〈フロアー (Void)〉の空間性は語れない。その際、云わばそれを可能ならしめ、又、それにより派生するとも見える更なる内部的地平関係に注目し、その道具の支える面に対応する上下方向の空間の変位を、ここでは層化と呼んでおく。

大地のあらまほしき現在化として、加工された〈フロアー〉なる〈底〉地平は、その成立の根拠を、立居し、走り、歩行する身体主体と、求心的で閉ざされた Void なるものに置き、そのことが、その内に在る主体が空間を、身体の拡大延張とする在り様を許し、全てのそこでの事物は、その空間を生きる私に向けられて集積し、私から計られるが故に、〈底〉は、下なる

下限として最も遠く在る存在となる。(無論、此の内、扉、窓なる道具が、空間性に多大な効力を備えているのであるが、此処では、上下方向の秩序を主題としている為に、排去して考察を進める。)

つまり、意味地平としての道具、装置の水平面は、私なる中心から計られ、私に向う程、私に親密な水平面として、私の足下、即ち〈底〉に近い程、疎遠なる水平面としての層化した秩序が向うことが出来る。がしかし、それ等も、道具、装置間に関連があって、同一の場で有機的にまとまりを示している時に明瞭に現われる——例えば、机と椅子がセットになっている様な場合——が、道具、装置が大地の具現化というよりは、1つの完結した機能存在である場合には、分離して置かれる時には——例えば、〈フロアー〉の上に唯一脚、孤立して置かれた椅子の様に、たとえ部屋の隅に机があっても——その背景をなす地が大地であるが故に、各々が、各々個別の照明を当てられて浮び上り、確固とした図として、等価な主張をして独立する。

他方、〈坐居し〉、〈横臥する〉私の身体を柔かく迎え、裸足でそれに密着しつつも、大地と明瞭に隔たれてある〈床〉では、空へと超脱し、透明で明晰な広がりとして、その下に大地を控えているから、視座を低くして此岸に留まり、〈床〉材の温く柔容として、量により完成した親密さ、身体化された行動様式 (礼儀作法) が参画補強して、〈床〉が、空間の色彩を産み出す母胎として、卓越した地平として、中心性が、行為主体の私か広がって、連続して伸展する。ここでは、走る私よりも立居する私が、立居する私よりも中腰の私が、中腰の私よりも〈床〉を大地に見立てて足裏を〈床〉に着けて立膝する私が、立膝する私よりも足裏を返えして正座、胡座する私が、場所を得て、共同存在的な支えがあって私が私になる。

つまり、〈床〉上では、道具地平は、〈床〉からの隔りに準じて計られ、全ては、窓枠の位置も、照明の方向と位置も、家具の面も、〈床〉に近い程、私に近く、その空間に所を得た一致した姿を呈すると云ってよいであらう。

既に触れた〈天井〉の加担は、〈床〉が野天の能舞台の如くに青天井に露呈している場合を想起する丈で十分であり、その際の層化の程度は微弱である。〈天井〉は、それ故、〈床〉と一対をなすもので、層化を増幅するのも、その1つの在り様であると考えられる。

(V) 結びに代えて、一横方向への切断に向けて—

私共の行為する場としての〈床〉は、正に、加工された大地なる〈フロー(基壇)〉には見られない、或る在るがままの自然を自然として、選択的に関わる在り様を残存している。そのことは、動く建具での横方向の切断——現前化と現在化の機能としての切断——に於ても同様に見られることであるが、隔りによって親密と近接をと両義的である。大地との関係に、自然との共働を保持しながらも、己れの空間、被護された場を造出する源初的なものとして在るが、発生的には、意図的に計画されていたかどうかは判らないが、いずれにせよ、湿気を避ける一義的因果関係だけで説明し尽せない在り様、構造として、すでに〈床〉は在る。コンクリートの函の〈底〉に敷かれた畳が、それなりの根拠があつてのことなのに、不調和であると体験されるのは、〈床〉が多義的で豊かな意味を持ちつつ身体と共に創り上げている生きられた構造を、そこではも早、残していないことの証左ではないだろうか。〈床〉はあくまで、平板なるものとして射映の内に支えられ、大地を現前させる。そこでは、その板を支えるものは、線材——日本の架構構造——でそれを貫くか、下から突き支えるか、上から吊るか、堅固な量塊から張り出すか、貫入して行く関係秩序で生きる。

基本的に畳なる〈床〉は、空間の中心として、身体への親密さに準じて不可避に構成されている浮ぶ薄い板であり、当前、肉化した社会的、文化的契機を看取れるが、いずれにせよ、身体が開示することは云い得よう。

それ故に、横方向の切断も、その発効の契機たる身体的なるものに対応させて、その畳の〈床〉性を支える中心的態度である〈坐居〉する在り様から考察をする。

そこでの身体が直観する横方向なる距離は、畳の上で〈立居する〉姿が、〈歩行する〉姿が、二次的で、傍流的で、云わば所を得た姿とは云い難い仮の姿であつて、恒に〈坐居する〉ことへの隔りから計られ、畳の近さへと誘われることから生きる。又、大地が、射映の内に現前しているからこそ、大地に〈立居する〉私の知覚領域に自分を安住せしめ、〈床〉と〈坐居する〉私の中心とがそれと出会うことによって、〈床〉に近接することによって、〈床〉上での横方向の隔り(距離)は増幅されて、大地の上での隔りよりも、よ

り隔るものとなる。加うるに、私が安住して〈坐居する〉〈ここ〉から、向こうなる〈そこ〉へと身体が充実し補完する営為が生む距離——足裏を上に向けて〈坐居する〉私が、まず足裏をもどして畳に接地させ、立ち、歩く仮の姿を耐え、〈そこ〉に至って腰を下し、足裏を返して完結するという身体が素描する投企された歴史的な距離——が与って力がある。つまりは、〈床〉の上での横方向の切断が、広がりとして恒に射映しており、見通しが可能で、投企する営為を身体が予料出来て、その歴史性が生じる処に成立していて、連続しているが故に切断される両義的な見えをしている。

障子、襖、几帳、蓐、衛立等が示す切断から¹⁵⁾、柱間に介在する真壁に至るまで、その両義性を顕わにしているのを見ても、〈床〉なる広がり損わない切断の参入と、道具による個々の空間の顕在化は、結局、身体に肉化され記憶された、共同存在的に保証された協約によって完成していると云えるのではなからうか。見えて来るものを見えないと身体化し、聴こえて来るものも聴こえないとする肉化した約束事、即ち、習慣なる礼儀作法が……。

注記

- 1) メルロ・ポンティエー、『行動の構造』(みすず書房)
- 2) アドルフ・ポルトマン、『人間はどこまで動物か』(岩波書店)
- 3) マルティン・ブーパー、『ブーパー著作集4』(みすず書房)
- 4) 市川 浩他、『身体現象学』253—261頁(河出書房新社)
- 5) 滝浦静雄、『想像の現象学』159頁(紀伊国屋書店)
- 6) ポール・ギョーム、『ゲシュタルト心理学』61—62頁(岩波書店)
- 7) メルロ・ポンティエー、前記書、161—168頁。
- 8) 同上、前記書、273—274頁。
- 9) L. ロブレック、K. ヘルト、『フッサールの現象学』29頁(せりか書房)
- 10) マルティン・ハイデガー、『Sein und Zeit』(Max Niemeyer)メダルト・ボス、『現存在分析学から見た身心の関係』理想500号、130頁。
- 11) 市川 浩他、前記書、253—261頁。
- 12) 木村 敏、『人と人との間』(弘文堂)
- 13) メルロ・ポンティエー、『知覚の現象学I』310—312

頁 (みすず書房)

- 14) 同上、『シーニュ I』139頁以後, (みすず書房)
- 15) 玉腰芳夫,『隔て現象に於ける 場所の構造—源氏物語の場合—』建築学会論文報告集 235 号, 95—102頁。
- 16) オットー・ボルノー,『Mensch und Raum』(Kohlhammer)

参考文献 (上記の他)

- 加藤信朗,『身体論素描』哲学 No. 25, 20—35頁。
- メルロ・ポンティエー,『眼と精神』(みすず書房)
- クルト・ゴールドシュタイン,『生体の機能』(みす

ず書房)

- E. ミンコフスキー,『生きられる時間 2』(みすず書房)
- ゲオルグ・ジンメル,『ジンメル著作集12』(白水社)
- マックス・シェーラー,『シェーラー著作集13』(白水社)
- カール・レヴィット,『近世哲学の世界概念』(未来社)
- レミ・クワント,『メルロ・ポンティエーの現象学的哲学』(国文社)
- 市川 浩,『精神としての身体』(勁草書房)
- 木村 敏,『分裂病の現象学』(弘文堂)